



6月号

ひだまり

今月のエッセー

最愛なる

皆さんは、犬派ですか？猫派ですか？それとも「どちらでもない」派ですか？因みに私は犬派です。

写真に写っているのは、愛犬ポロです。見て下さい、このつぶらな瞳。可愛さ満点。見ているだけで癒されます。

ポロは、今年で十一歳になります。犬の十一歳は、人間でいうと六十歳だそうです。もうすっかり中年のおじさん（ポロは雄です）。いや、もうおじいちゃん領域にさしかかってきました。

私が帰省した際、玄関を開けると「ワン、ワン」と出迎えてくれます。

この「ワン、ワン」が「お帰りなさい。」

なのか、「あなたは誰？」なのか。地元を離れ、東京に生活圏を移してから、普段ポロと会わない私は「ちゃんと覚えてくれているかな。」と少し不安になります。

しかし、尻尾を振って抱き着いてくる様子から「お帰りなさい。」だと判断し、ほっとします。

数年前、私はパウリンガル（犬の鳴き声を日本語に翻訳する装置）なるものが株式会社タカラトミーから発売されていることを知りました。

「これは、画期的！」

「犬の言葉が分かるかも。」

私は、一瞬購入しようかと迷いました。しかし、ポロの姿を見ていたら・・・（分からなくなっちゃって、いやや）

言葉が分からなくなっちゃって、「ワン、ワン」と尻尾を振って、抱き着いてくる。そんな関係で十分。「ワン、ワン」は「ワン、ワン」でいい。そう思いました。

「長生きしてよ。」

最近、そんな想いで最愛なる存在との時間を大切にしています。

◆田中仁秀

仏教のことば

「刹那」

刹那という言葉の意味をご存知でしょうか。よく「刹那的」とか、「刹那主義」といった形で用いられますが、これらは「一時的な享楽にふけるさま」をいいます。ただ、「刹那」という単語そのものは、ネガティブな意味ではなく、あくまで時間の最も短い単位を意味します。一説には、指をパチンとひとはじきする瞬間が六十五の刹那と等しいとも言われています。

自分の前世や来世を教えるて欲しいと言う弟子に対して、お釈迦様は、「そんなことは考えなくてよい。ただ今、この刹那を大事にして生きなさい」と説かれました。大切なのは過去でも未来でもなく今この瞬間だということです。

心理学者のA.アドラーの著作にも次のような一文があります。

「線としてとらえるのではなく、人生は点の連続なのだと考えてください。線のように映る生は点の連続であり、すなわち人生とは、連続する刹那なのです。」

過去や未来に目をそらすのではなく、ただこの刹那に目を向けることを心掛ける。国や時代が違っても大切な事は変わらないのですね。

◆本田真大



編集後記

最近私たちは、駒澤大学の付属高校にお伺いして特別授業を行ってきました。その際、私が感じたのは確実な時間の流れです。

というのも、これまで私は教えてもらう立場でした。しかも、どちらかと言うと、その最中「早く終わらないかな」などと考えているタイプでした。そんな私が、いつの間にか人前で話をして伝える側になっていく。立場の変化に時間の経過を感じたのでした。そして、立場の変化はこんなにも景色を一変させるものなのかと驚かされました。

時間が経つにつて、本当に早いものですね。

◆伊藤正法

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門
〒一〇五・八五四四
東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内
☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



三年度
田代浩潤
たしろこうじゅん

『色々な一人の私』

あなたのあだ名は何ですか？

私にもいくつかあだ名はありますが、一番親しみのあるのは、大学時代の友達が使っていた「たっしー」で、今も彼らは私をそう呼びます。けれども、彼ら以外からそう呼ばれると、少し気恥ずかしく、くすぐったい心地がします。ですから、わざわざ自分から「たっしーって呼んで」なんて言うことはまずありません。しかしつい先日、このあだ名を通じて気付くことがありました。先月末、駒澤大学の付属高校で授業をした折のことです。

授業中、私たちはいつも苗字と名前の書いた名札をつけています。しかし、今回はその名札に「あだ名」を書いて臨むことに

なりました。というのも、これまでの授業を振り返ってみると、どうも「指導する側⇄指導される側」という具合に、私たちが正解らしきものを一方的に伝えるばかりで、生徒たちが活き活きと自由な意見を出しにくい状況になってしまっているように感じたからです。

それが功を奏したのか、当日、生徒たちは活発に意見を出してくれました。これまでを振り返ってみても特に盛り上がった授業だったと思います。

しかし、私が嬉しかったのはそのことではなく（いやいや、それも嬉しかったのですが、それ以上に）授業中、生徒の多くが私のことを「たっしー、たっしー」と呼んでくれたことでした。

活発な彼らは、たかが私のあだ名で盛り上がり、続けて「俺は、「私は、」と、自然と彼ら自身のことを話してくれたのです。その時私は授業を進めることに夢中でした。しかし、今となっては振り返ってみると、彼らの方から心を開いて近づいてきてくれたようで、振り返る度に嬉しくなってしまうのです。おまけに、授業を終えて駅に向う道中、さつき授業を

した生徒が「たっしー！」と声を掛けてくれて、またまた嬉しい気持ちにさせられたのでした。

あだ名はいくつあっても、それらは一人の人物の呼び方です。確かに私は田代浩潤です。しかし、「田代さん」と呼ばれる時があれば「浩潤」と呼ばれる時もあり、はたまた「たっしー」と呼ばれる場合もあります。つまり境遇によって私というキャラクターは変化しているのです。しかも「田代さん」でいる私と「たっしー」でいる時の私には言動に一貫しない点もあります。しかし、それらはどれも一人の人間、田代浩潤なのです。

今回、久しぶりに「たっしー」が顔を出したことで、私は普段、私として最も登場している「田代さん」から一時的に開放されました。当時「田代さん」でいることに疲れていた私は開放感を感じ、とても爽やかな気持ちになりました。それは裏を返せば「田代さん」でいることに、無意識のうちに縛られていたということなのかもしれ

ません。束縛からの開放を得るチャンスは意外と近くにあるものです。

仏教の行事

だいはんにゃえ

『大般若会』

大般若会では「大般若経」というお経を読みます。大般若経は「西遊記」で知られる三蔵法師玄奘が翻訳したお経で、字数は約五百万字、巻数は六百巻にもなり、あらゆるお経の中でも最大規模になります。

私たちになじみ深い般若心経もこの大般若経の真髄をわずか二百六十二文字に収めたものと言われています。

大般若会は、その式の中で大般若経を読むのですが、全て読むのは難しいため、転読と呼ばれる略式の方法を用います。転読とはお経本を左右に大きく開いて、パラパラとアコーディオンのようにめくり、それだけで読んだことにするので

大般若経を読んだその功德によって世界平和や国家の繁栄、人々の健康と家内安全、五穀豊穡を祈念する法要です。

◆深澤亮道
ふかざわりょうどう



ひだまり書房



『孤独の果てで犬が教えてくれた大切なこと』

著 瀧森古都

『俺と一緒に、あの犬を誘拐しない？』

家族の温かみを知らずに育った十一歳の少年・宏夢（ひろむ）は、移動図書館の館長をしているミツさんに、そんな提案をする所から物語が始まります。

せまい物置の中で飼われている犬を救うべく、誘拐を計画する二人。決行当日、色々な思いが交錯する中で誘拐を行うのでした。

移動図書館を通じ、さまざまな人物や事件と遭遇する宏夢とミツさん。その都度、それぞれの運命と向き合い、生きることの意味を考えていきます。

果たして二人の運命は・・・

そして、犬が教えてくれた「大切なこと」とは何か。

生き方について考えさせられる一冊です。

◆伊藤正法
いとうしょうほう